

学習院大学法学部 日本政治思想史Ⅱ 学年末試験

担当 中田 喜万

[講義：毎週金曜 2 時限]

2025 年 1 月 24 日（金）第 2 時限 実施

中央棟 402 教室にて

※B 4 用紙 1 枚両面に自筆で記入したメモだけ持ち込み可。

手書きを（縮小）コピーしたものも、自筆で記入したメモとみなす。

そのメモは試験後に回収する。自分の名前・学籍番号を明記しておくこと。

なお海外からの留学生には、持ち込みについて特別に配慮することがある。

※下記の問題すべてに解答すること。問題順どおりに答えなくてもよいが、どの問題に対応する解答かを明示すること。

※所定の答案用紙（罫線入り）に、読みやすい文字で記入すること。

解答の文字が薄くならないように注意すること。

答案用紙が不足したら申し出ること。

【 問 題 】

第一問 幕末・維新期の公議輿論の観念の展開について、実際の制度設計の模索をまじえながら論じなさい。

第二問 前近代における神仏習合の諸相を、具体例を 3 つ以上挙げながら論じなさい。また儒家神道の例なども挙げて、近世の神仏儒 3 者の関係を説明しなさい。

第三問 教育勅語について、その成立前史から失効までを含めて、論じなさい。

以 上

【 解 説 】

第一問

幕末の「公議輿論」の観念は、一方では現実の政治過程を反映して、他方では西洋近代国家の書物を通した紹介によって、それぞれの政治的立場に関わらず、時代に共通して重視されることとなった。現実の政治過程としては、ペリー来航時における老中阿部正弘の政治指導に始まり、文久改革後の京都での雄藩連合構想（参与会議、四侯会議）、越前藩（松平春嶽、中根雪江、由利公正）や土佐藩の周旋（坂本龍馬も）、そして大政奉還に至る。西洋近代の制度輸入としては、徳川慶喜のブレーンとして従事する蕃書調所の加藤弘之、津田真道、西周に始まり、横井小楠なども共鳴していた。

薩摩藩主導の王政復古クーデターと木戸孝允が修正した五箇条の誓文、「広く会議を興し万機公論に決すべし」は、「会盟」を結ぶ有力諸大名の「列侯会議」を期待する公議政体論を見えにくくしてしまった。しかしながらそれでも、明治新政府は全国の支持を調達するため、その後も「会議」の設立を模索し続けなければならなかった。

すなわち、王政復古の大本営直後の「議事所」構想に始まり、限られた情報からアメリカ政治に倣った『政体書』、次いで「公議所」、「集議院」、「左院」へと議会政治の試行錯誤が続いた。その系譜の上に、後藤象二郎、板垣退助（両名とも旧土佐藩）、江藤新平、副島種臣（両名とも旧佐賀藩）らの民撰議院設立建白書の左院提出があり、自由民権運動の口火を切ることはよく知られている。それがその後の様々な憲法草案、そして曲がりなりにも大日本帝国憲法の制定過程につながることを想起すると、公議輿論の観念は、近代日本における立憲主義を起動させる思想であったと評価することができよう。

第二問

神仏習合の例として、古代から、藤原氏の氏寺である興福寺と春日大社が元来一体のもので、本尊の釈迦如来が日本の武甕槌命（たけみかづちのみこと）と同体と見なされていたこと。また伊勢神宮ですら周辺が仏寺だらけで、その神職ら自身の菩提寺まであったこと等も挙げられる。近世の有名な例として、日光東照宮とその別当寺である輪王寺（上野の寛永寺とも連携）が、東照大権現＝薬師如来という山王一実神道の理論により一体で運用されていたことなど。

神仏習合は大抵の場合、理論上も経営の実際も、仏教が主であり、神道は従属的立場に置かれていた。本地垂迹説によって、神道の説話は普遍的な仏教の教学に読み替えられて考えられたし、葬送・墓地など経費のかかる（収入となる）事業はおよそ仏教により営まれてきた。だから近世に入っても、神仏習合したままの諸宗派は、徳川政権の庇護と管理

の下、仏教寺院が主導権を握る形で経営された。そのような中で、仏教の劣位に甘んじることを潔しとしない神道家の一部に、儒学の鋭い仏教批判の影響を受け、または儒学の学説を適宜利用して、仏教寺院を批判してそこから独立を模索する者が現れる。儒学者の方でも、それが前提とする儀礼が日本社会にほとんど欠けていたから、妥協して独自の神道学説を築き、神社の信仰に接近を図る者が現れる。それが近世前期にしばしば現れた儒家神道で、林羅山の理当心地神道を皮切りに、山崎闇斎の垂加神道などが有名となる。これは一種の神儒習合で、学問的に吟味すれば牽強附会のそしりを免れないものであったから、やがて近世中期に和学・皇国学が興ると顧みられなくなっていく。代わって、特に平田篤胤派の国学による神道学説が幕末にかけて盛んになる（ただし平田派国学も、実は他の学説を模倣・密輸入した部分がある）。

結果として、近世の体制内宗教である仏教（とそれに習合した神道）、国学により独立して発達した神道、そして信仰への足場を得ることに失敗した儒学、この3者が、併存することになった。

第三問

講義内容の該当箇所を参照されたい。

以上